（様式）

令和３(2021)年度　いちご新品種実証展示ほ　成果情報

栽植密度の違いが「とちあいか」の先つまり果発生に及ぼす影響

要約

栽植密度を高めることで年内収量は増加するが、年明け以降は花房間葉数が増え腋花房の発生が遅れたため、総収量は減少した。また、対照区（株間 27cm）に比べて供試区（株間 23cm）において先つまり果等の障害果の発生が多い傾向にあった。

○ 展示のねらい

「とちあいか」は「とちおとめ」以上の収量性を有するが、先端障害果(先つまり果、先白果)の発生が多く、生育が旺盛なほ場で多い傾向にある。定植時期を遅らせることで初期の発生を抑制することができるが、遅らせすぎると減収を招くため、単収を維持しつつ先端障害果の発生を抑える技術が必要である。そこで、栽植密度の違い（供試区：株間 23cm×畝間 95cm、対照区：株間 27cm×畝間 95cm）が先端障害果発生に及ぼす影響を調査する。

○ 主な成果

表１　花房間葉数（枚/株）

	頂～１次	１～２次	２～３次
供試区	5.6	3.6	2.3
対照区	4.7	2.2	2.8

※頂：頂花房、１～３次：１～３次腋花房を示す

表２　障害果発生率及びＢ品率（%）

	障害果発生率	Ｂ品率
供試区	4.5	3.6
対照区	3.8	3.0

※障害果は先白、先詰まり、不受精果を対象とした

表３　可販果収量（kg/10a）及び販売額（万円/10a）

	11～12月	１～４月	合計	販売額
供試区	970	4,032	5,002	640
対照区	877	4,234	5,111	660

※販売額は各月の数量及び平均販売単価をもとに算出した

花房間葉数は、頂花房から１次腋花房の間及び１次腋花房から２次腋花房の間で対照区に比較して供試区で１枚程度多かった（表１）。

規格外になる障害果の発生率は、供試区で高い傾向にあった。12 月まで先つまり果はなく、先白果が見られた。１月は腋花房収穫期に大玉となり先つまり果が多く見られた。Ｂ品率は、供試区で高い傾向にあったが平均値で 0.6%程度の差であった（表２）。

年内収量は、対照区に対して供試区で１割多かった。しかし、年明け以降は３月以外の月において対照区が多く、合計値は対照区で多かった。販売額は、年内では収量の多かった供試区が対照区に比較して１割程度多かったが、年明け以降逆転し、総販売額は対照区で 20 万円/10a 程度多かった（表３）。

○ 今後の方向性

本年産が暖秋で腋花房分化が遅れる環境であったが、株間が狭いことで生育の遅れが助長され、収量の減少につながった。芽数が増えることで増収となるとちあいかの特徴を考えると、株間が広い方が収量や品質で有利と考えられる。

実施機関 ： 下都賀農業振興事務所経営普及部　　実施場所 ： 下野市

問合せ先 ： 栃木県農政部経営技術課技術指導班　TEL 028-623-2322　FAX 028-623-2315